

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷二十第

## 論 說

戰時戰後に於ける獨逸税制變革……………法學博士 小川郷太郎

地方税としての所得税の重要……………法學博士 神戸 正雄

勞賃と勞働生産力との關係……………法學博士 田島 錦治

文明史に關する論争……………法學博士 財部 靜治

植民地の財政政策に就きて(四)……………法學博士 山本美越乃

## 時 論

常平倉運用の標準……………法學博士 戸田 海市

## 說 苑

京城六矣塵に就いて……………經濟學士 黒 正 巖

## 雜 錄

史的唯物論略解……………法學博士 河 上 肇

富といふ支那字に就て……………法學博士 河 上 肇

新 著 紹 介……………法學士 本庄榮治郎

# 歴史と社會學との關係 (三)

財部 靜治

## 十四

歴史と文明史との間、その優越及正當に就き、猛烈に戦はれたる論争も、效果なく否全く無獻なることも、亦以上述ふる所を、推して知るへしとしつゝ、Gumplovicz の論したる所も、本編の順序上、之を棄つるを得ず、引續きその所説を骨子として説かん。

文明史により、通有の史記を非難せる所によるに、史記は全く筋違ひの諸事項を取扱ひ、歴史の神髓たるへき、開化の發展は却つて之を不問に付す、人間の固有歴史たるへきは、政治史にあらずして、文明史に存すとす。之に對し史家の答ふる所によるに、歴史は近時にありては、開化の變遷をも、亦同様に問へり、Schlosser (前出) 以來、文學、學問、藝術の發展をも、充分に顧慮し、之と共に又素より、その叙説上大事件及國家行動に、相當なる首位を讓る、されは特別な一文明史の存在を、正當ならしむべきものなし、そはその自然的背景たるへき、政治史より引離しては何等の意義を有せず、一の形骸たり、部分たるへき、第二段の發展、最良の場合にも、同等なるへき發展の、叙説に過ぎざるへしとす。

右相互の非難は、等しく根據なし、歴史の正當なることにつきては、既に説ける所あり、史記上政治史に偏するの、弊は誠しむへしとするも、政治を度外して、世の變遷を説き得へきに非ず、そは時の秕政を彈劾するに、須らく大鼓も亦叩くへしとするも、國家なくして開化なきの事實を、(拙著經濟眼三五頁參照) 没却すへきに非ると異なるなし、文明史家による右の非難は、かくて斥けらる、されど又開化發展の叙説も、同様に史的叙説の物體として、採擇され得へきことも自明なり、素より開化の發展を、その自然の土臺、即ち社會組織、國家組織の、發展より引離さは、偏頗又不備たるへし、されどかゝる弊は、個別の叙説に關する事柄たり、最後に又一の武器、又は一道具の史的發展も、そのものとして獨立に之を叙説し、各社會發展一切との、關係を離れて之を説き得へし、されどかゝる個別發展を説きつゝ、その中に觀念的元素を、閃かしむるや否やも、亦叙説者の技倆により決せらる、凡てかゝる叙説にありては、關係する所叙説の對象にあらずして叙説の仕方及方法にあり、銃砲の歴史も、亦取扱振り如何によりては、觀念なく平凡に編まれたる、全「世界史」よりも、文藝上學問上の價值、高きを得へし、特に金屬の鍛鍊、彫鑿、鑄造上、由來字内に冠たるの、事功を擧げ得たる日本國民としては、長さ僅かに三尺のみたるも、其光如秋水、銳利可截鐵(逸名氏日本刀歌參照)の日本刀に就き、その發展を究め、その間に社會史的價值判斷を、寓せしむるか如きは、トロツキの衆議主義紹介同様、又はその以上に、意義ある研究題

\* cf. Dillon, The Arts of Japan. p. 120 fg.

目たるへし。

## 十五

文明史の正當なることに關し、一時史家と文明史家との間に、戦はれたる論争を、茲に幾分か詳察するは、その處を得たり、即ちそは獨逸の有名なる、生理學者たり自然史家たりし Emil Du Bois Reymond (一八一八—一九六六) により、火蓋を切られ、爾來劇しく戦はれし論戰にして、その論争上三派は、引續き示すか如く、寧ろ不當とすへきもの多く、Reymond が假りに下せし、結論に就きては、一史家 Buchholz の公明にして尊敬すへき、懺悔を見たり、その成行次の如し。

Du Bois Reymond は文明史及自然科学に關する、一大學講演中、自然科学か史家により、全く等閑に附せらるゝを譏り、此狀あるに拘はらず、「自然科学の歴史は、固有の人間史たり」、而して前者なき後者は、全く了解し得へきに非すとし、かくて氏は問へり、何か羅馬衰亡の原因たるかと、史家は之を知らず、寧ろ自然史家は、此間に種々の答を與へたり、「Liebig は不合理なる穀作のため、伊太利の土地より取去られ、その補給を見さりし、燐酸、加里の不足は、羅馬の衰亡を惹起せることを示し、(本誌第九卷八七頁以下參照) Conrad は伊太利の森林濫伐及灌水の涸渴か、その衰亡につき責ありと主張せり、\*されど之あるかために、羅馬衰乏の原因を論し、自然科学を等閑に附せること、之につき責ありと、總括し得へきに非ず、「古開化か衰替せるは、地中海

\* cf. Conrad, Liebig's Ansicht von der Bodenerschöpfung und ihre geschichtliche, statistische und nationalökonomische Begründung. '64. s. 22 fg.; Ders., Volkswirtschaftspolitik. 4. Aufl. '04. s. 32.

沿岸國の土地、燐酸、加里の貧弱を、告ぐるに至れるかためたらす、寧ろその開化は、美學及幻想でふ、飛砂を土臺とせるより、その開化を襲ひ來れる、蠻民の海嘯か、容易にその飛砂を、洗ひ去れるによる」羅馬の軍隊か、火器を以て武裝されたりとせんか、頭腦殺伐なる蠻民をも、逐ひ返し得たるならん、爾來前世紀に至り、自然科學の意義及重要、認識せらるゝに先たち、幾多の世紀は過ぎ去れり、かく人間の精神發展の成行か、太古より擬神人觀時代を経て、幻想的美的時代に入り、次いでスコラ哲學的禁欲的時代を通し、晩近の技術的歸納的時代に、進めることのみか、歴史の値打ある一對象たり、「通常世界史の名を冠せられ、諸王諸帝國の盛衰、條約及相續争、戦争及侵略、合戦及攻圍戦、一揆及黨派争、都市荒廢及民族争闘、殺害及斬首、殿中陰謀及僮侶の詭計以外に、何物をも語らず、萬人に對する萬人の闘争につき、功名心貪慾及色情の、暗澹たる波瀾重疊、權威、反逆、仇討の一起一伏、欺瞞、迷信及偽善の紛糾以外、何物をも示さ、るもの以外に、吾人は茲に全く異なる、一世界史あることに着目す、通有史家の陰鬱なる描畫は、唯長き中間期を挿みて、一統治者の眞偉大及昌平なる繁榮を畫き、かくて晴々しく、人を爽快ならしむるのみたり、哀しむへくも多くは有名無實に過ぎざる、一豪傑の心を引立つへき氣質により、照さるゝことは一層煩繁なり、かく涙の小河、血の海を通し行くこの道は、最後に何處へか落着くへき、公民の歴史にありては、それ自體の中に、働くへき諸力に基づき、恒常の一進歩は

窺はれざるか、國王は一層賢明となり、國民は一層温順となるべきか、寧ろ歴史は、人か之により何ものをも、學ひ得ざるべきことを、人に學はしめんかためにのみ、現存するか如く想はれざるか、近時に至る迄、人間は確かなる順序を踏み、自由、風紀、勢力、藝術、福祉及知識上、歩一歩高き階段へと、登り來れるや、その歴史が吾人に示すものは、寧ろ一の退化行動 Sisyphos' arbeit に非るか、一開化紀概念内には、既にその時代を衰亡に、祀り込めるの事實存せざるか」とは、その所論なり。

普通史記に關する右の不滿と、世界史の意義に對する、疑惑との爆發を見しは、深く思索すべく、而も亦自然科學的素養ある、一智者とては、その人が歴史に關し、自己のため満足なる辯明を、なし得ざる人たる限り、全く尤もらしきことたり、之と全然同じきことは、Reymondに先づこと四十年前、Voltaire によりても行はれたり、即ちその一七四〇年に現はれたる道德論 Essai sur les moeurs 中、同様なる不滿及疑惑の感情につき、同様なる表明をなせり、世界の隅より、他の一隅に及ぶ、この革命の雜沓中、「風か砂及波を揚ぐるか如く、人々を風靡すべき」諸原因の、天命的連鎖あるのみたる以上に、何等の高尙なる觀念を、認めずとせることにより、彼を右の疑惑に陥らしめたり、氏はその歴史叙説上、繰返し疑惑の叫を發して、之を中斷せしめたり、「汎言せんか、凡てこの歴史は、犯罪、愚昧、不運の堆積なり。その間多少の徳、多少の

幸運期を見ることあるも、それは野蠻の砂漠中、ここかしこに撒點せる人家を、發見するにさも似たり」と疑へり。

第十八世紀にありては、歴史に關し、Voltaire 右の判斷を下せるも、憚る所なきを得、之かたに劇しき攻撃の、的となることなきを得たり、蓋し同世紀にありては、尙未だ史記を専門とし、史記以外何事にも當らざる者を、出す程幸福ならず。而して歴史を叙説することは、學問の最高功績と、想はれたればなり、Voltaire はその當時の學者及研究家か、一の學問に局限されざりしと同様、自身も亦一の史家たりしより、歴史及脩史につき、かく露骨又自在に、判斷を下し得たり、之かために確かに、根本論を促進せしめたるも、一面全體に關する大活眼と、他の知識範圍に關する、客觀的判斷とを、犠牲に供することのみにより、之をなし得たり、然るに第十九世紀の如く、歴史の専門家及歴史教授か、その専門に熱中し、その極全體としての世界及學問につきては、單純に盲目となるか如き時代にありては、Du Bois Reymond か歴史に關し、史家 Voltaire も言ひしこと以外に、何事をも含まざる、前記發言のため、史家により劇しき攻撃の、目的物とせられたり。

他の點につきては大なる功績あり、又素より哲學者たらざりし、史家 Ottokar Lorenz, Die Geschichtswissenschaft, '86-90 は思惟したり、「人間史の範圍に於て、自然研究者かその法則と、名

つくるものに等しきものを、發見せんとする陰鬱の熱望は、益々大なる要求」を以て、現はれ來るとし、かくて「此派の主要代表者としての、Du Bois Raymond を非難し、斯人は「大なる明晰と、流暢とにより、此見解の諸結論を、極度に及ぼせりとし、此一派と分離するは、歴史家の義務なりとせり。

この「分離」につき、Lorenz は多くの要求を以て立てるも、その分離の成行は薄弱たりき、氏か「滅落せる諸國の歴史は、地殼の歴史と、同一原理により、取扱ふを得ず」と思惟せるや、素より正當なるも、地質學と歴史とに於ける、かゝる原理の齊一は、Raymond もその他何れの人も、之を主張せざりき、而して Lorenz か、相違の理由として附言せる中に、「吾人は前者即ち歴史にありては、一人の選り好みによりて遂行せられ、又別途に決定され得へき、行動のみを考察に入る」とせるを以て、彼はそれのみを以てするも、既に史記を學問の範圍より斥けたり、蓋し「人の選り好み」に出て、「又別途に決定され得べき」、行動の叙説は、一科學の對象となり難し、寧ろ唯俗人の好奇心を、充たすべき歴史物語として、多少の程度に於て、一藝術品たり、實在の詩人的複製たり得べきのみ。

それと一 Raymond の科學的立場と、Lorenz 及史家の歴史物語的立場との間、一妥協一和解あり得ざるは明かなり、蓋し科學につきての一論争は、史上の出來事が、「人々の選り好み」によ



り動かさるゝとし、從ひて「又別途に決定され得へし」とする人々とは、之を交へ得へきに非ればなり、然るに *Reynold* の説ける所は、史上の出來事たるも、亦自然の全所生の因果關係以外に出でざるものゝみにつきて然り、そは今日迄史記により、探られざりし立場にして、又社會學の助援を得ずんば、探られ兼ねへき所なり。

素より史家か之に對し、*Comte* 及 *Buckle* 以來、歴史に對しても、亦この自然科学的立場を、探らんとせる人々か、之を敢てせるもその効果を擧げざりしこと、由來之を試みたる者も、かゝる自然科学的「歴史法則」を、指摘するの域に達せざりしことを、擧げて非難するは、是迄としては正當なり、されどかゝる努力の效果なかりしことは、その立場至當なることを、反對せしむべき論理的論旨たることをなし、*Comte* も *Buckle* も *Reynold* も、かゝる歴史法則を一つたも、指示し得ざりしは確かなり、されどそはこの問題か、彼等により解決されざりしことを、證するのみにて、その解決不可能を立證することなし。

特に *Reynold* に關しては、科學としての歴史につき、氏が否定の判断を下せるは、全く正當なり、此點につき氏はその以前に、*Comte*、*Schopenhauer* 及 *Buckle* か、同様に正當に言へる所を、繰返せるに過ぎず、唯一の科學的史記は、如何にして出來得へきかに關する、積極思想に就き、氏も亦誤れるは、*Comte* 及 *Buckle* か同し試みに誤れると異らず、蓋し「自然科学の歴史は、固

有の人間史なり」とせざる氏の命題は、一の僻論にして、眞面目に受け入るゝを得ず、自然科学は人間に非ず、人間界に於ける、副次の一現象に外ならされはな。人間の歴史は、自然科学の歴史に於けるのみならず、あらゆる科學及藝術に、反映せらるゝに確かなり、されはその故を以て後者を前者と齊一なりとするを得ず、文明史の存在は正當となし得べきも、Buckle も亦なせるか如く、之を「固有の人間史」と思ふは、大なる一誤謬なり。

諸現象満ち充ちたる中より、普遍なるもの、觀念、法則を索むるに馴れ、かゝる法則究明のみを、學問の職分視する、哲學者及思索家にとりては、右の如きは恰も尤もらしきことにして、從ひて又恕すべきことたり、素より人間界の統一的發展に伴ひ、進歩的に發展すべき一開化ありとせば、その開化上かゝる一般法則は呈露されん、かくて思索家及哲學者か、かゝる一法則に執念し歴史の本領又その神髓を、その漸進發展に求めんとするも、怪しむに足らざらん。

されどかく觀するの誤たるは、開化かその時々<sup>フエッコクシ</sup>の支持者につき、連綿たる進歩を示すことなく、各場合に之を政治的衰頹及滅落に致し、之と共に開化も亦衰へ、次いで何時か復た、灰燼中より飛揚がる、希臘の神不死鳥の如く、昂り來ることのみにより、考ふるも明かなり、かゝる事情の下、開化漸進發展の叙説上、明かに開化なき大空隙、又は野蠻の時代と謂は、言ひ得べきものも當然認むべく、そは「開化漸進發展の法則」によりては、説明を許さず、之か説明を別に求むるの

要あるへし、夫れあらゆる文明史は、克し單純なる敘事以上の一物たり、又一科學たりとするも、開化發展のみを、釋明し得るに過ぎざるへし、詳言すれば社會現象を基本とし、その原因を社會狀態の中に、萌さしむへき社會心理現象を、一言にして掩へは、最廣義の人間社會を、その一次現象として戴くへき、二次的社會心理現象を、釋明し得るに過ぎざるへし、かく説き來らんか、別に又この一次現象をその研究對象となし、開化の法則よりも、寧ろ社會の法則を編むことに、努むへき他の一基本學あることを、之のみによりても暗示す、その學問は社會學なり、従ひて科學としての歴史を、否認せる點は、Voltaire, Buckle 及 Reynold の言説中、正當とすへき所たり、蓋し歴史は、何等普遍に通用すへきものを示さず、何等の最高法則を授けず、解し難き事實錯雜を、授くるのみなればなり、されど彼等の言説中、誤謬とすへき點は、彼等かこの普遍的なるもの、この法則を全く他の範圍に於て、即ち二次的なるを以て、他の現象とすへきもの、範圍に於て、發見し得へしとせる點にあり、かゝるものは一次的社會現象の範圍に於ても、亦詳しく考察を遂げて、發見され得へき所、之によりて恰も亦、學としての社會學は立てらる。

猛烈に Reynold に反對して立てる諸史家も、氏につき右の誤謬を闡明することなかりき、唯就中若干の人、假令は Dietrich Schäfer, Das eigentliche Arbeitsgebiet der Geschichte, '88 は、明晰なる認識よりも、寧ろ正當なる本能に促され、Reynold が主張せる如く、歴史に代ふるに、文

明史を以てするを、正當とすとなすは、誤れりと説けり、文明史の研究により、「史記の一新時代に、入れり」とすることに、氏か反對せるは全く正當なり、蓋し文明史的興味の前前に、現はれ来るものは、諸國民の政治的宗教的信念及情熱にはあらざるも、その日常の習慣及風俗に外ならされはなり、又 Schöler が「國家、政治團體を以て、數千年を通し、史的研究及思索上の、秀絶又風靡せる對象たりきとし、將來も亦歴史學上、決定的意義」を占むるの、要ありと主張せるは、争はれざる所なるへし、されど氏か史家の職分として、「國家、その起源、その由來、その存在及職分の條件を、理解せしむべき」ことを挙げたるは、史記に歸するに、確かに不隨意にその解決に、貢獻すへき職分を以てし、史記か由來未だ替て、意識的に之に當れることなく、寧ろ社會學に歸するを、一層痛切とすへき職分を、之に歸せんとせるものなり、蓋し Schöler 自身言へるか如く、史記は多くは「自己の所屬せる種族の譽のため、その祖先又は時人の行動を、叙説すへきこと、「鼓舞的芳薰として、之なくは史記を死せる知識たらしむべきものも、常に國家又は國民生活により、史記に入り來ること」、「史記に自然的なる、右の立脚地より」遠かるは、決して害なしとせざること、「史記は政治思想を帶ふべきこと」、「史記の精神は、元來諸國民の記憶の才に外ならざること」、畧言すれば「何れの史記も、根本に於ては、國民的叙事詩 Nationales Epos たること」等の事情は、國家としての國家の本質を、認識するの最大障礙たればなり、實に歴史

か國民的敘事詩たる性質を帯ひ、又その點に於て世人を裨益する所多きの趣旨は、前にも説ける所あり、吾人か本居翁の王鉾百首を讀み、山陽の日本樂府を吟誦しつゝ、その中に含まれたる、史實の虚實を考證することを忘れ、感奮興起し易き所以のものも、不知不識右の性質に、驅使せらるゝものたり、されは Schöler か一面に此性質を認め、歴史に對し「國民的、政治的、宗教的、衝動より、遠かるべきに非ず」と要求せるは可なるも、他の一面に於て、歴史は國家の本質を、了解せしむるの職分を、盡すへしと要求せるは、首尾一貫せず、國民的政治的見地と、客觀的科學的認識とは、互に相容れず、詩をとるか、學問をとるか、その一つに出づるの外なし、同時に兩者によらんとするは、不可能なり。

史記につき、同時に史たり學たるを、求むることに、矛盾を宿すことは、Schöler 自身も注目せり、されと氏はこの矛盾を解き、又は排除し得さりき、氏は問へり、「この見解(國民的詩としての)上、歴史は必然、偏頗に又徒黨的、狹量的に、國民的とならざるか」と、此問に對し國民的とならずとは、當然答へ得ざる所なり、然るに氏は「國民及國家への所屬は、決して全然拒まるゝを得ず」、個人は「國民としての冷靜なる考察上、外國人に對しても亦公平なるため、如何なる立場をとるべきかを、その國民に教ゆ」と説きつゝ、自から慰めたり、氏が歴史として、當然そのことに當るべきか如く、「その國民を教ゆへし」としつゝ、一面には又「材料及その關係に、何物を

も運び込まざる、叙説及類聚」たらしめんとせるを以て見るに、氏か一面には如何に深く、詩と學との矛盾に陥り、他の一面には學問の觀念につき、如何に曖昧に陥れるか、明かなり。

Schäferは併はずへからざる二物を、併はさんとせり、即ち歴史か永遠に然るべきものたるか如何、國民的詩之と共に又政治的偏頗を伴ふ、叙説としての史記と、史記としては決して然らざるへく、寧ろ社會學たるべきものとしての、國家社會に關する、客觀的學問とは然り。

Schäfer は Raymond の基本觀念に對して、公平ならざりき、若し氏か Raymond を解したりとせば、斯人か歴史は藝術なり、學問に非ず、歴史は人間界の出來事及行動を、藝術的に描寫し、藝術の創作と、同様なる影響を、及ぼさんことを目的とすへく、之に反し國家及社會生活の、一般法則を編むは、歴史の事柄に非すと説けるに對し、單純に反駁すへかりしなり。序に注意すべきは、後に引説すべき Gothein の著書か、「成行に關し、活ける觀想を自から養ひ、又之を讀者に傳ふることを、一言以て之を蔽へば、藝術的要素あることは、歴史家にとり、始めにして又終りなり」と言へるの、全く正當なることなり、されど之に附言して、右藝術的要素は、「史記をして他のあつゆる學問以上に、秀てしむ」とせることのみは、氏も亦誤れり、蓋し學問は藝術たらず、何等「藝術的要素」を要せず、從ひて此點を挙げ、史記に劣ると議し得されはなり、諸學と歴史との間に、かゝる比較をなすは曲なり、史は學と異なることを目的とす、前者は成行に關し「活け

る觀想」を、後者は一般法則を目的とすればなり。

前記の如き反駁を加ふるに引替へ、Schäfer の詳説か、その鋒を向けし所は、文明史を以て、歴史の一部に過ぎずと、するの思想にあり、史的研究は人間の風教及教化、發展の跡を尋ねんとするを以て、第一にその眼を、人間と國家との關係に向くべきなり、史的研究は恰もその從來の研究上、所謂文明史に負はしむるを、決して賢明とせざるべき、職分をも果たしたり、かくて非科學的諸國史を排除し、その代りに唯一の科學的文明史を、おかんせざる Reymond の要求に對し、Schäfer は答へたり、正當に觀想され、國民的政治的に編脩されたる歴史は、同様に最良の文明史なりと。惟ふに右兩者は互に了解せず、Reymond は諸學問及發展につき、一の普通法則を、發見することのみを求むるかために、史記に疑を懷くも、Schäfer は全く Reymond の非難を解せず、叙説の序に彼れに投げつくるに、「背理」の一語を以てし、文明史の至要内容は、同様に政治史に屬すとせるかために、特別科學としての文明史存在を、至當とすへき一切の事由に反對せり。併せて注意すべきは、Bernheim も歴史につき、かゝる範圍擴張を求めたることなり、即ち氏は太古の叙説をも、所謂有史以前記 Prähistorie をも、歴史に求めたり。(前掲書四四頁以下参照)

Schäfer の講演に對する、答へるして現はれし Gothein, Die Aufgaben der Kulturgeschichte, '89 は、右の問題につき、右の如き取扱をなし、諸原理に遡らす、基本觀念を闡明せず、その主張を

論理的に立證せざるか如くんは、何ものをも判定せず、廣さに於ては進むべきも、無效果に終るべき議論を、助長するに過ぎざるべきことを示せり。

文明史は歴史の一部に、過ぎざるへしとせる Schäfer の主張に反對し Gothein も亦思惟せり、歴史は文明史たるの要ありと、而して Schäfer は文明史を、政治的國民的歴史の中に、配することを要求せるも、Gothain は思惟せり、「政治史はその必要及價値を保ちつゝ、存続すへし、されど通史即ち文明史は、政治史かその中に羅致せられ、その配下たるべきことを之に要求す、蓋し國家生活も亦「人間風致の一部」に外ならず、而も亦決して至要なるものとなし兼ねぬはなりと。

Gothain は尙自然科學と、精神科學と分離さるゝの要ありとする、二元的見地に立てり、而して國家と國家に關係あることゝは、此見地よりせば、人間精神の一事業たるを以て、歴史は精神科學中に、その一地位を占むへしとせり、かくて氏は此見解を逐ひ、進みて論したり、「人間精神の學問は一つに過ぎず、唯その學問を、不變に續くべき基本より觀想するときは、吾人は之を哲學と名づけ、その對象の變遷及發展を、認識せんとするときは、之を文明史と名づく」と、かくて Gothein は Schäfer に、正反對の論旨として、Reymond の論旨と、殆んと同じきものを説けり、されど Schäfer も Gothein も、彼等として第一に注意をそゞくべきこと、即ち歴史が學問たるや否やの、問題を究むるに當り、學問に關し明快なる、概念決定を、先たしむることを怠れり、



従ひて Goethein の叙説にありても、亦奇異なる予盾に遭遇す、詳言すれば氏は歴史に、美的たるべしと要求しつゝ、之を學問と呼へり、されど今若し何人か、天文學に對し、「藝術的要素」を顧慮すべきことを、要求したりとせば、世人は何と評すべき。

右の矛盾は一認識のみにて、解決し得へし、即ち歴史と社會學とを、判然區別すること之なり、「成行の活ける觀察」、政治生活の「藝術的描寫は、歴史の事柄なり、史的過程に於ける、普通法則を究明するは、社會學のことたり、右の認識にして、一旦遂げられたりとせんか、術としての歴史と學とを、永く混同することは已まん、引いて又歴史との限界も、亦之を付し得へし、蓋し右の如くなりせば、文明史は社會學の一副範圍として、副次的社會現象、一層適切に説かは、社會心理現象としての開化の、成立、本質及發展を、その對象とすへければなり。

著書 *Geschichtsforschung und Geschichtsphilosophie*, 80 及前にも引ける「歴史研究法教科書」中、歴史の觀念及職分を研究し、之と共に又歴史と文明史及社會學との關係をも、説くに至れる Bernheim と雖も、未だ右の認識を遂ぐるに至らざりき。

Bernheim はあらゆる史記を三種に區別し、之を紀傳史 (Einleitung in die Geschichtswissenschaft, 97 にありては、その代りに Erzählende Geschichte と呼へり) 紀事本末史及(發生學的)發展史に、分てる程度内に於て、右の如く争はるゝ問題も、容易に解決さるへしとせり、即ち右の仕方により、歴史か非

學問的たりとして、色々説き出されし、主張一切の力を弱めんし、夫等の主張は、「紀傳史」虞らくは又「紀事本末史」のみにつきては適切なるも、「發展史」につきては然らずとし、之と共に又諸發展の、あらゆる叙説に、「學問」てふ資格を、取還さんとしたり、(されど氏はその著「歴史研究及歴史哲學」中、Homer の詩「die Sagos, die Nibelungen」は、詠せられたる史に非ずして何ぞや」と、歴史に關し、正當なる見解を説けり、此文よりせんか、あらゆる史記は、「話されたる詩」たりとの結論は、論理的に生ず) 學問に關する他の概念、即ち學問は「發展」を叙説するのみならず、遍ねく通用さるべき法則を、編むとなすの概念を以て、「自然科學」概念を、偏頗にも「精神科學」に、遷せるものと呼へり、之あるかために Bernheim によるも、亦裁決は仰かれたりとするを得ず、寧ろ論争は氏ども亦、學問の概念につき、戦ひ盡さるゝの要あるに似たり、少くとも氏は明白に説けり、「史學は遍ねく通用すべき、法則を發見する能はず、又之を欲せず、之を白狀するは、歴史か一の自然科學たらす、一の所謂精微科學たらさること、を白狀することに外ならず、されど之あるかために、歴史は全く學問に非すと主張するは、學問てふ概念を、專斷又偏頗に、自然科學に限らんとする、人々の一謬見なり、人間に關する知識につき、その渾圓及種類を、公平無私に達觀する者、誰か歴史に一學問の、完全名義を差控ゆへしとする者あらん、學問てふ概念につき、一層詳細に如何なる定義を、下し得ることも亦然り、蓋し歴史は現象界に於ける、特殊の一範圍につき、内部の關聯脈絡あり、統一あり、又確かめられたる

知識を、吾人に授くればなり」と、素より學問の概念を定むるに當り、「現象界に於ける、特殊の一範圍につき、内部の關聯脈絡ある、知識」のみを、授くべきものなりとせんか、その際歴史は學問たるへし、されど學問につき、かゝる一概念決定を與ふるは、廣きに過きたり、かくするときは學問の中に、その他「知識の堆積のみを授く」るに拘はらず、何等學問とすへからざる、幾多の教科をも、數ふべきこと、ならん、Lazarus は夙に六十年代に、全く正當に書けり、「學問は普通法則を窮むべきなり、事變從ひて史的生現の過程を、その常理とすべきものにより、叙説すべし」なり。

Bernheim か右の如き、學問の概念決定に對し、「科學概念を自然科學に、限れるもの」と呼べるは、それ或は正當ならん、されど一元論の見地よりせんか、歴史には、人類、自然史の、一面あるに過ぎず、從ひて歴史が學問あるや否やの争は、他の一論争舞臺、即ち一元論及二元論の、論争舞臺に於て、争ひ盡さるゝの要あり、されどそれは Bernheim の如く、自然が「終了し」、「人間の自由精神」かその力を揮ふべき、「精神科學」の特別範圍に、止まらんと欲する人に、その裁決を仰ぎ得べきに非ず。

而も亦右の仕方により、古き確實の認識か、繰返し新たに問題とせらるゝの狀あらは、決して前進し得ざるへし、即ち夙に Herder は人間史を、一の「純自然史」なりと宣言せり、之か當然の

結論として、この人間史は裕に、一「自然科学」たるべき材料を、授け得へしと論すへし、今日尙之につき、一討論を許すべきものなるか。

以上は Gumpowicz の評論を、その儘率直に紹介せるものなるか、吾人は就中後段の所説につき、聊か疑問なきに非ず、人間界の事柄には、自然の繼續と、人の自由精神との、競合ありとも觀し得べきものあり、果して然らば此範圍に於ける、常理の相對性を認め、絶對立教の見を立てず、時處による比對適宜を許すは、寧ろ賢明とすべきに非ずやと、考ふる者なりと雖も、今その詳論を後日に譲り、引續き氏の所説を承けつゝ、稿を進めんか。

Bernheim につきても亦その實あるか如く、學問てふ語を許すや否やにより、同時に一の等級を決するもの、如く觀し、Bernheim 唱ふるか如く、歴史につき學問てふ「完全名義」を要求し、かくて恰も叙事としての歴史は、學としては歴史よりも、低き一等級を占むべきもの、如くするかために、その論争は愈々苦しめらる、こは諸階段及諸等級に關する、吾人の觀念を、かゝるもの存せざる一範圍に、遷さんとするものなり、素より敢爲なる一中尉は、無能なるも大尉たる者に比し、俸給も少かるへく、肩章の星も一つは少し、されどかゝる觀念は、精神的述作の範圍には全くその應用なし、歴史は生現せるもの、叙事に過ぎず、一の學問に非ずとするも、有爲なる一史家は、無能の天文學者に比し、遙かに貴重なり、何れにしても最良の天文學者又は生理學者

と、同値たり、學問てふ「完全名義」を争ひ、此名義は一層大なる榮譽を伴ふか如く想ふは笑ふべきなり、されど右の謬れる教制的概念は、從來右の問題を鮮明ならしむる上に、甚たしき妨礙となれり。

Buchholz in *Quidde's Zeitschrift*, 89 は歴史の本質及職分に關する問題を、かゝる誤謬の從概念全部より脱却しつゝ、又客觀的に取扱ひたり、氏は謂へり「史家の職分は、發展の跡を慎重に尋繹し、活眼を開いて之を觀想し、又出來得るだけ純潔に又曲筆なく、之を吐露するにあり、その以上に高尚なる諸目標を、掲ぐることを肯んすへきに非ず」と、加之氏も亦全く正當に、何れの史記にも免かれ兼ねべき、性質を指摘し、その性質上必然史記に、非科學的たるべき條件を、附與すへしとせり、此點につき一番に擧ぐべきは、史的價值判斷なり、何れの史家もかゝる判斷を斷念することなし、その何れも生現せることの、單純表露に拘束せらるることなく、寧ろ何れの史家も賛意又は嫌惡を、明言又は默示し、何れも賞讃を寄せ、非難を表白す、實に史記は之のみを以てするも、既に學問の範圍外にあり、蓋し學問は定まれる法則に従ひて現はれ、因果關係の嚴密なる、支配下に立てる、諸現象系列のみを、取扱ふへければなり、天文學者、生理學者、言語學者は、何等の價值判斷を與へず、化學者は諸元素の特質、その交互關係、及親和を叙説するに當り、賞讃をも非難をも、表白することなし、この一事情によるも、尙歴史と他のあらゆる科

學との間、原理上深き相違あることを示さるるか、史家として「學問」てふ名義を、一の尊稱視せんとせば、それは可なり、その際彼等に好意を表しつゝ、歴史を學問と呼び、之に右の「完全なる名義」を、付することに賛成し得へし、されど同時に又天文學、數學、物理、化學及社會學につきては、他の一名稱を發見すへきなり、その間一事は確かなり、即ち價值判斷を與ふへき教科と、あらゆる價值判斷を排斥すへき、普通法則を編むへき教科との間には、一の原理的相違を、認むるの要あること之なり。素より右 Gumplovicz の所説につきても、前に疑へる點を推し擴げ、價值判斷に勉むへき歴史に對し、別に容觀的たらんことを、要求するも無意義ならずとすへき、餘地あるに非すや、歴史以外に價值判斷を試むへき、學問あるを認むへくんは、夫等諸學も亦學問に非すと、判定すへきものなるや、疑を挿む者なりと雖も、前例に依りその詳論を略す。

之と共に右價值判斷の、規矩に關する問題は、之を不問に付せんとす、蓋し史家は由來かゝる一規矩を、發見せること全くなく、將來も亦全く發見せざるへきを以てなり、史記は「事實の道德的秤量に達す」へきなりとせる、Sybel の要求に對し、かゝる一規矩を發見するの、不可能を説きし Lorenz (前出) は評論せり、「道德的秤量を求むるも、この道德的秤量とは、元來如何なることなるかを、示すへき筈なりとせば、吾人をして滑脱圓轉せしむへきことゝならん」自から欺かす、事物に無理を加ふることを欲せざる人々は、何人も此學問上何時も、絶對價値を斷念するの

裏あり」、されは Lorenz は「相對價值」を發見せんと努め、かくて此學問にありては、露西亞人か天迄も褒め揚ぐべきものを、佛人は汚物中に引下くことあるべきを、始めより認むへしとせり、夫れ然り前出蘇老泉の立言は、假りに天下の公論なりとするも、等しくその相對性を、認むることによりてのみ然らん。

眞の學問は右の如き、價值判斷を與ふることを、その目的とせざるを以て、容易にかゝる各判斷を斷念すべきも、「歴史にかゝる價值判斷ならんか、俗人の意識に貧弱又空虚と映すべきことを」、史記としては本能的に感ず(Buchholz)而して常にかゝる價值判斷を以て、その叙説を飾り、依りて史家及その讀者の、痛快なる一欲求を充たさんとす、されど史家のかゝる價值判斷に對し抗議を唱へ、その規矩の正當ならんことを、求むるの聲に對しては、史家中最も冷靜にして、又最も客觀的なる Buchholz は、簡單に答へたり、吾等は各自の趣味によりて判斷す、後人も亦その趣味により、吾人を判斷して可なりと、そは誠に史記にとりては正當なり、心情の一欲求を充たさんとする、史記の目的にとりても、亦完く足れりとすへし、唯一科學のためには、推稱し得べき處置にあらず、固有の科學は絕對眞理の究明、諸現象の法則認識に努むればなり、宜なる哉、故田口博士の好著、「日本開化史」自序中、短言克く「歴史者、古來之評也」と謂へるや。(未完)